
三月　～やわらかい傷痕～

あまみ紫束

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三月　　～やわらかい傷痕～

【Nコード】

N5459H

【作者名】

あまみ紫束

【あらすじ】

今春、卒業する先輩との最後のドライブ。

「もう諦めます。だから、……だから私を振ってください」

フロントガラスに打ち付ける雨。

単純な往復運動を繰り返すワイパー。

点滅する深夜の赤信号。

対向車のいない国道四号線。

助手席に座った私。

右手の運転席には、先輩。

「振ってくれたら諦めます。もう苦しいのは厭いやなんです」

ずいぶん生々しい話だと思われるだろうか。

否いや、きっと、ほとんどの人がつまらない痴話だと呆れるだろう。

しかしこれは二十歳の私にとって、あまりに重要すぎた恋なのだ。

今春卒業した先輩は、もうこの町に帰って来ない。

「先輩」

ハンドルを握る指は、何も言わない。

私は無口な指を見詰めた。

あれ、無口な指……無言の指？

矛盾している。指に、口という器官があるはずがないのだから、無

言で当然だ。

なんて、あまりに下らない。

ふツと失笑してしまった。

「先輩」

無言の指に向かってささやいてみた。

声が、私の声が、かすれている。だが、先ほどよりも明るい色だ。

ハンドルにかかる先輩の右手がするりと滑り、長い人差し指がひよ
いと動く。

不意にカチ、カチ、と鳴くウインカー。

順調に左折した二人乗り軽自動車。

ゆるやかに右手に伸びていく国道四号線はどこまでも続くらしい。
その先は闇だ。

否、いつかは途切れることは分かっている。

この一瞬は永遠ではないのだ。

「……………」

四号線から逃げるように左折し、しばらく直進。
まだ街灯が立っている片側一車線。

あと五本ほど街灯をやり過ごせば、真っ暗な林道に入る。
その先には、こじんまりとした展望台がある。

見もせずに、なぜこんなことがわかるかって？

それはあまり口外したくない。

けれども、秘密にしておく理由もない。寂しいことに。

三月だから。

三月だから、先輩が離れていくから、秘密にする必要がなくなった。

路^{みち}の先がわかる理由。

先輩が、ドライブしようと誘ってくれた夜は、ほとんどここに来るからだ。

林道から開けたところは、町の高台になっており、夜景が見渡せる。

彼女とも来たのかな、……と考えかけて、辞める。

今、助手席は、私を乗せているのだから。

先輩は、私に恋していない。

ああ。

きつと、下らないと一蹴されるだけだろうね。

でも、まあ、もう少しただだから、聞いてくれる？

「……先輩」

先輩は一昨日の卒業式まで金髪だった。

今夜、迎えに来たときから、黒髪になった。

なった、と言うか、地毛の色に戻ただけだ。
そこはやはり社会人になるわけだから。

いつの間にか先輩の横顔を、じつ、と見詰めていた。

「先輩。キス、一個だけ、棄^すててください」

長い睫^{まつげ}。

前だけ見ている眼。

高めの鼻。

厚いくちびる。

白いシャツ。

半袖から伸びる腕。

無言の指。

ハンドル。

スピードメーター。

フロントガラス。

ゆっくりと視界が開けて、深夜の暗い町明かりが眼下に広がる。

ぼつりぼつりと散らばる田舎の町の光たちは、宝石箱よりも、蛍の
家族に似ていると、いつも思う。

いつも、思う。

これも今日で最後なのだ。

もう、思うことはない。

蛍の家族は引つ越さないのに、私はこの感覚を忘れなければいけな

いのだ。

低い丘の頂上でブレーキを踏みこむ先輩。
ぎッ、とサイドブレーキを引き上げる。

シートベルトがしゅるんと巻き取られる音。
ワイパーが無機質に往復する音。
雨がガラスに跳ねつく音。

ちゅ、と一瞬。

「せん……、……」

自分の頬が濡れるのが分かる。
泣いている。私が泣いている。私が、私は、泣いている。

視界がのんびりとぼやけた。

蛍の家族が肥大化して滲んで薄くなって消えてしまいそう。消えて
しまふ。消える。
消えるのだ。

「もう一個、先輩。もう一個、……棄てて、ください」
リサイクル精神のなさを論じる暇などない。
どんどん、棄ててください。

先輩は棄てるほどのキスを持っているはずだ。

私はキスを受ける。

与えるキスなんて、持ち合わせていない。

先輩は、二度、キスを私のくちびるに棄ててくれた。

きつと……普通のひとたちに軽蔑されるだろうね。

私は浅ましい。浅はかで、莫迦^{ばか}な人間だから。

「……帰ろつか」

先輩の言葉。

先輩の、最後の、私への言葉。

帰ろつ。帰りましょう。否、帰りたくない。とは、……眩けない。

フロントガラスがびちゃびちゃと泣いている。

蛭も何も、先輩のくちびるも、見えないほどだった。フロントガラスが泣いている。

三月。

私は、重大な恋をしていた。

（後書き）

処女作です。

あ、ちなみにフィクションです。

詩的な小説というか、小説的な詩にしたかったのですが、
見事に惨敗した模様です。

お目通しくださって本当にありがとうございました。
感想など頂けると励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459h/>

三月　～やわらかい傷痕～

2010年10月27日01時42分発行